

メッセージ

導入

おはようございます、教会のみなさん！私はデイビッドと申します。今日、神の言葉を皆さんと分かち合うためにここにいることをとても嬉しく思います。

今日はルカ 15 章からお話しします。この章は「失われた羊」、「失われた銀貨」、「放蕩息子」のよく知られた話が含まれています。

多くの方がこれらの物語を知っているかもしれませんが、今日、皆さんがそこから新しく意味深い何かを発見できることを願っています。

まずルカ 15 章 1 節から 3 節の最初の三節を取り上げます。そこには群衆に誰がいたのか、そしてなぜイエスがたとえ話を語ったのかが書かれています。

（「最初の三節から始めます。群衆に誰がいたのか、イエスがなぜたとえ話を語ったのかに焦点を当てます。」）

ルカ 15:1-3

そのとき、すべての取税人や罪人たちがイエスに近づいて、彼の言葉を聞いた。するとパリサイ人や律法学者たちは不平を言って言った。「この人は罪人を受け入れて、彼らと食事をしている。」そこで、イエスは彼らにこのたとえ話を語られた。

取税人と罪人たちはイエスに惹きつけられていました。パリサイ人や律法学者たちも常にそこにいて、イエスを批判し非難するのを待ち望んでいました。明言されてはいませんが、群衆の中には町や村のさまざまな人々がいました。男女問わず、羊飼いや農民、親たちも含まれていました。

罪人たちは社会の底辺にいました。彼らは泥棒、物乞い、嘘つき、詐欺師であり、宗教的ではなく会堂にも行きませんでした。

次の社会階層は取税人でした。彼らはユダヤ社会で最も軽蔑される存在でした。なぜなら彼らはローマ支配者のために、同じユダヤ人から税を徴収していたからです。しかもパリサイ人と共謀することもありました。当時、神殿税、財産税、所得税、農業税、戸籍税（人頭税）、通関税や関税、通行税などあらゆる税がありました。

その上の階層は羊飼いや農民、羊や牛の所有者、地主でした。羊飼いはおそらく羊の所有者に雇われて羊の世話をしていました。

パリサイ人と律法学者は罪人や取税人とは交わりません。彼らはその人たちを呪われた者として見なしていました。彼らの考えでは、自分たちとは違い、そういう人々は天国に行けないと思っていたのです。

この章でイエスは「たとえ話」を語ります。ギリシャ語で「たとえ話」は“parabolé”（パラボレ）と言います。

スライド 1

Para は「そばに」や「隣に」

Boléは「投げられた」や「置かれた」

つまり Parabolé（たとえ話）は「そばに置かれたもの」

たとえ話とは、未知のもの（例えば霊的な真理）を、羊飼いや銀貨を持つ日常の体験のような身近なもののそばに置いて教える方法です。これにより聞き手は親しみやすい状況を通して神の真理を理解できます。

イエスがたとえ話を語ったのはなぜでしょうか？

それは、たとえ話が聞き手に状況や教訓をよりよく理解させる助けとなるからです。聞き手が日常生活で経験したことに基づいて作られているためです。

たとえ話は地上的な物語でありながら、天上的な意味を持ちます。受け入れる心のある者には霊的真理を明かし、理解する意志や能力のない者にはその真理を隠します。

3 節にはこう書かれています。「そこで、イエスは彼らにこのたとえ話を語られた」

これは、3 つのつながった話を含む一つのたとえ話であることを意味します。最初の話は「失われた羊」です。

聴衆は誰だったか？

イエスの話を聞いていたのは若い少年や羊飼いでした。この話は彼らに響いたでしょう。

ルカ 15:4

「あなたがたのうちに、もし百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹を失ったら、九十九匹を野に残して、その失った一匹を見つけるまで追いかけない者があるだろうか？」

羊と羊飼い

羊は単純な生き物です。彼らは食べて、眠って、さまようだけです。自分を守ることができず無力です。だからこそ羊飼いが必要です。導き、守り、迷ったときに連れ戻すために。

この話では一匹の羊が群れから迷い出てしまいました。羊飼いは単に失ったことを受け入れません。九十九匹を野に残して、迷った一匹を見つけるまで追いかけます。

意味

羊飼いが羊を見つけたらどうなるでしょう？

ルカ 15:5

見つけたとき、彼はその羊を肩にのせ、喜びます。憐れみの心で、非難ではなく。

スライド 2

羊飼いは羊を叱ったり叩いたりしましたか？いいえ！優しく肩に担ぎ、喜びます。同様に、キリスト・イエスは良い羊飼いであり、天の栄光を離れて迷える者たち（私たち）を探し求めています。人生の最も暗く厳しい時も、キリストは怒りや恥ではなく、愛と憐れみで私たちを肩に担いでくださいます。

反省の質問

善い行いをしても、自分自身を救い天国に行けると思えますか？

（ここで少し立ち止まり、考えたり答えたりしましょう。）

真実はこうです。私たちは自分の善行によってではなく、恵みによって救われます。キリストを通して、キリストは私たちを探し出し救うために来られました。

喜びと祝い

「まことに、わたしは言います。悔い改める一人の罪人のために天においては、悔い改めを必要としない九十九人の正しい人々よりも喜びがある」(7 節)

私たちがキリストに見出されたとき、罰せられますか？

いいえ！喜びと祝いがあります。

罪人が悔い改めてキリストに向かうとき、天は喜びます。それが父なる神の心です。

非難ではなく、回復。拒絶ではなく、喜び。

失われた銀貨

次に「失われた銀貨」の背景を見てみましょう。

イエスの時代、婚約の日には、ユダヤの習慣として花婿が婚約者に銀貨 10 枚か金貨 10 枚を贈りました。これらの貨幣には花婿の家の名前や家紋のような印があったかもしれません。結婚式の日には、新婦はそれらの銀貨を頭や首飾りとして身につけました。婚約の日から結婚の日まで、新婦はいつもその銀貨を磨きながら、将来の夫のことを思っていました。銀貨がよく光るほど、その女性は花婿のことをたくさん思っていたのです。もし銀貨が輝かなければ、それは婚約者の性格を表し、怠惰で無責任であると見なされました。

さらに悪いのは、その銀貨の一枚を失くした場合です。結婚が取りやめになるかもしれません。なぜなら花婿から見ると、彼女は注意不足か関心がないと判断されてしまうからです。

聴衆

イエスの話を聞いていたのは若い女性や婦人たちでした。

スライド 3

彼女たちはこの話に共感しやすく、貴重な銀貨を失くした時のパニックと見つけた時の喜びを理解できました。

観察

「失われた羊」の話は屋外で生き物が登場しますが、「失われた銀貨」の話は屋内で無生物の話です。銀貨はおそらく暗くて埃っぽい隅に落ちていました。努力しなければ見つけることはできません。女性はランプを灯し、床を掃き、注意深く探し続けて銀貨を見つけました。

これは私たちに教えています。失われた者は遠くに彷徨っているとは限らず、私たちの身近に、家や教会の中に、影に隠れて気づかれていないこともあるのです。そして、たとえ話の女性のように、私たちも神の言葉というランプを灯し、邪魔なものを取り除き、根気よく探して見つけて回復させなければなりません。

意義

この室内の話には強い真理が含まれています。

人は良い環境にいて、クリスチャン家庭で育ち、教会に通い、聖書を持っていたとしても、キリストが本当に自分の人生にいないと迷っているのです。正しい環境にいるからといって、必ずしも神との正しい関係にあるわけではありません。

銀貨のように、無生物で自分が失われていることに気づいていないように、人も霊的に迷っていても気づいていない場合があります。罪の中にあっても、深く居場所のない気持ちがあっても、罪悪感や悔い改めの意識が欠けているのです。教会に通っている人の中にも、物理的にはそこにいても霊的には離れている人がいます。神の言葉を聞いているのではなく、心は別のことに向いていたり、ネットショッピングを見ていたり、ただ形だけで参加している場合です。

もうひとつ重要な点はこうです。

銀貨は自分の行動のせいで失われたのではなく、誰かの不注意のせいで失われました。これにより、他人の選択や怠慢が霊的に大きな影響を及ぼすことを思い出させられます。親やリーダー、信徒の中に、責任ある生き方をしなければ、他の誰かがつまずき霊的に暗闇に落ちることがあります。

このたとえ話は目覚ましの鐘のようなものです。

私たち一人一人が自分の神との歩みだけでなく、神が私たちに委ねられた人々に対して霊的に警戒し責任を持つことを促します。私たちの生き方は思っている以上に他者に影響を与えます。私たちは誠実さ、愛、信仰をもって模範を示し、キリストを映す者となるように呼ばれています。

「お互いに悪口を言ってはいけません、兄弟たちよ…」(ヤコブ 4:11a)

「人を裁くな、そうすれば裁かれることもない…」(マタイ 7:1)

かつてクリスチャンだった友人たちに会ったことがあります。なぜ信仰に戻らなかったのか尋ねると、多くは似たような答えをしました。

それは、他のクリスチャンたち、友人や同僚、上司でさえ、裏切り者や自己中心的、あるいは不誠実な人たちと出会ったからだ。

ある人はクリスチャンの上司がスタッフの功績を全部横取りした話をしました。その経験は仕事だけでなく、霊的な歩みにも深い傷を残しました。こう思ったのです。「これがキリスト教なら、なぜ戻る必要があるのか？」

悲しいですが、これは現実の警告です。

私たちの生き方は証です。良くも悪くも。

時に人はキリストを拒むのではなく、キリストを代表する者たちの不実さゆえに離れていきます。信徒として私たちは言葉だけでなく、人格、誠実さ、愛においてキリストを映すよう召されています。誰かが神から離れる理由を私たちが作るのではなく、むしろ光となり、神に立ち返る道を示す者でありたいものです。

失われて悔い改めない者は神にとって役に立たないように見えるかもしれません。

仕えられず、霊的に他者を助けられないかもしれません。

しかし、神はあきらめません。

銀貨を熱心に探す女性のように、その価値ゆえに持ち主は探し続けます。

同様に、どれほど落ちぶれ、罪や恥で覆われていても、私たちは神の目にはまだ大切な存在です。

私たちが迷っているからといって価値が消えるわけではありません。

女性は「たった一枚だから、まだ九枚ある」とは言わず、見つけるまで探しました。
神は同じように、粘り強く愛をもって私たちを探します。
そして見つけた時、私たちを低い場所ではなく、神の国での完全な価値と目的へと回復します。

喜びのルカ 15:10

「同じように、悔い改める一人の罪人のために、天の御使いたちの前では喜びがあります。」

銀貨が見つかったとき、女性は喜び、友人や近所の人々を呼んで共に喜びました。
前の「失われた羊」の話と同じく、失われたものが見つかる大きな喜びがあるのです。

これは、天が一人一人の魂が神に立ち返るたびに祝福することを思い出させます。
どんな回復も小さすぎることはありません。どんな人も軽んじられることはありません。
一匹の羊、一枚の銀貨、一人の人間でも、神は喜び、天全体が共に喜ぶのです。

放蕩息子

ユダヤの律法によると、父親が亡くなるとその遺産は分割され、長男は二倍の取り分を受け取ります。
父親は生きていうちに財産を分けることもできましたが、あまり一般的ではありませんでした。この話では、次男がまだ父親が活着ている間に自分の取り分を要求しました。これは、遺産の方を父親よりも重んじているように見え、まるで父親が早く死んでほしいと思っているかのようでした。

そのため、息子は自分の取り分を受け取り、他国へ行って贅沢な暮らしを楽しみました。家族のことは忘れてしまいました。しかし、父親は息子のことを忘れてはいませんでした。

やがて状況が変わりました。息子は遺産を使い果たし、土地には飢饉が襲いました。お金も食べ物も住むところもなくなりました。絶望した彼は豚の世話をする仕事を始めました。ユダヤ人にとって豚は不浄な動物なので、これは非常に恥すべきことでした。

このことからわかることは何でしょうか？

- ・彼はユダヤ人でありながら、絶望的な状況で豚の世話をするこゝも厭わなかった。
- ・飢えのあまり、豚の餌を食べたいとまで考えた。
- ・すべてを失い、金銭も尊厳も自己尊重も失った。
- ・人生で最低の状態に陥った時、彼は正氣に戻り、父の元に帰る決心をした。

意義

多くの人は最後の手段として神に立ち返ります。
しかし、なんと素晴らしい最後の手段でしょうか。
自分の限界や破綻が、新たな神との出発点となることもあるのです。

息子が帰ると、父親は叱りませんでした。喜びました！

父親は3つのものを息子に与えました。

「そこで父はしもべたちに言った。『最上の服を持ってきて彼に着せなさい。そして指輪をはめさせ、

足に靴を履かせなさい。それから肥えた子牛を連れてきて屠り、食べて楽しもう。なぜならこの子は死んでいたが生き返り、失われていたが見つかったのだ。』そして皆が楽しみ始めた。」(ルカ 15:22-24)

- ・最上の服 - 息子が赦され、清められたことを示す。
- ・指輪 - 彼が家族の一員であり、身分と権威を持っていることを示す。
- ・靴 - 彼が奴隷ではなく、愛される息子であることを示す。

そして肥えた子牛が屠られ、祝宴が開かれました。失われていた息子が家に戻ったからです。

この箇所から父親についてわかることは？

1. 彼は見守り、待っていた。心は決して諦めなかった。
2. 息子に走り寄り、告白を最後まで聞く前に抱きしめた。
3. 深い愛が息子の心に悔い改めを起こした。
4. 息子が帰る前にすでに赦していた - これが恵みである。
5. 息子の帰還を守り、回復し、祝った。
6. 質問も叱責もなく、ただ両腕を広げて迎えた。

ここで父の喜びが伝わります。

しもべたちに肥えた子牛を用意させ、喜びの時を祝わせました。

息子が帰ったことは、まさに喜びの理由でした。

物語の中で一番幸せだったのは誰でしょう？

息子ではありません。

父親です。

失われたものが見つかったからです。

長男の気持ち (ルカ 15:28-30)

長男は怒り、家に入りませんでした。

父は出て行き、何度も長男にお願いしました。

長男は言いました。

「見よ、私は何年もあなたに仕えてきましたが、一度もあなたの命令に背いたことはありません。なのに友達と楽しむために子ヤギをもらったことは一度もありません。それなのに、あなたのこの息子が娼婦たちと共にあなたの財産を食いつぶしたのに、あなたは肥えた子牛を屠って祝うのですか？」

長男は怒り、祝宴に加わろうとしませんでした。

父は何度も祝宴に来るよう説得しましたが、長男は喜ぼうとしません。

長男は弟を娼婦たちと遊んだと非難しましたが、物語にはその記述はありません。長男の憤りと批判的な心が明らかです。

ルカ 15:31-32

父はやさしく言いました。

「息子よ、あなたはいつも私と共にいる。私のものはすべてあなたのものだ。しかし、あなたの弟は死んでいたが生き返り、失われていたが見つかったのだから、祝って喜ぶのは当然のことだ。」

父は祝うことが正しいと長男に伝えました。

失われた者が見つかり、死んでいた者が生き返ったのです。

振り返りの質問

もしあなたが長男の立場だったら、どのように応答しますか？

恨みを選びますか、それとも喜びに加わりますか？

結び

この美しいたとえ話で、イエスは三つの登場人物を通して神の心を示しています。

- 父は私たちの神を表し、恵み深く、忍耐強く、愛にあふれています。
- 長男はパリサイ人や律法学者を象徴し、外見は敬虔ですが内面は憐れみと恵みを欠いています。
- 次男は過ちを犯し迷った私たちすべてを表し、憐れみを必要としています。

ですから今日の問いは、彼らが何をしたかではなく、あなたが誰になるかです。

- 次男のように、自分の必要を認め、悔い改め、父のもとに帰る者になりますか？
- 長男のように、恨みや誇りにとらわれ、受けた恵みを他者に延ばそうとしない者になりますか？
- それとも父の心を映し、愛をもって手を差し伸べ、赦し、失われた者が見つかることを喜ぶ者になりますか？

今日も、天の父は待ち続け、探し続け、そして帰ってくる一人ひとりを喜んでいます。

みなさん、目を閉じて、主の前で静かな時を持ちましょう。

その言葉があなたの心を探るように。

今日、あなたはどこに立っていますか？

誰に自分を重ねますか？

帰るべき次男ですか？

誇りと憤りを手放すべき長男ですか？

回復を喜び、他を迎える父の心ですか？

神の霊が、ただ感情だけでなく行動で応える助けを与えますように。
帰ること。
赦すこと。
父のようになること。
アーメン。